

単独と神秘と ― 野村実先生の信仰

本稿は一九九六年十月二十日の「野村実先生を偲ぶ会」で語ったものを、紙幅に従って一部を省略、縮約したものである。先生の文章は、すべて『野村実著作集上巻』からの引用である。

「人間味の信仰」 一九七一年のクリスマス講義で野村先生は、内村鑑三がヒューマニティという英語を「人間味」と訳し、「人間味が欠けている者が、宗教的に偉大になるはずがない」と言っていると紹介されて、「内村先生は特別な見方をなさる先生ですね、ほかの人にはちよつと言えないことです」と感嘆しておられます。その先生はご自分の最初の著書を『人間・シュヴァイツェル』と題されたのでした。

先生は確かに生涯キリスト信徒として生きられました。しかしその信仰は決して教義的な固苦しい、いわゆる「立

派な」信仰ではありませんでした。ご自分の信仰を語って、先生は「信仰というものは、ヒルティがいったように、稲妻のように瞬間的なものである、ということに大事にしたい。今信じたことが、もう次の瞬間には信じていないということだっているだろうと思うのですね」と言っておられます。実に謙虚で、実存的な、それこそ人間味にあふれた信仰ではありませんか。

先生に、内村とシュワイツァーという二人の師があつたことは今更申すまでもありませんが、慎み深い先生はご自身のことはめつたに語ることなく、わずかにこの二人の師をして自己を語らしめるといふ風でありました。以下先生の信仰を「単独」と「神秘」といふ二つの言葉を手がかりに考えてみたいと思います。

単独 先生はデンマークの哲学者

ゼーレン・キルケゴールが大好きでした。沖繩講演の一つ「絶望」（この表題も彼からの借用）の中で、先生は「クリスチャンでないといい（つつ）、クリスチャンでありたいと願いながら死んだ哲学者」に深い同情を寄せるとともに、「自分はただのひとりになって神の前にゆかなければ本当に神様には近付けないのだ」と信じた、キルケゴールの「単独者」の主張に強い共感を示しておられます。

また先生は、シュワイツァー追悼講演「ひとりで歩いたシュワイツァー」の中で、彼の子供時代のあの有名な「パチンコ事件」や、アフリカ行きを決意した時の周囲の反対などの例を挙げて、彼は「最後の最後までひとりで歩く孤独の人であつた」、そして「博士は『キリストに在る』秘義をもってその孤独に堪えた」と言っておられます。その講演の結びで「私たちは小さな凡人であるが、博士をしてひとり歩かせないよう努力したい」と言われた野村

先生もまた、「最後の最後までひとり
で歩く孤独の人」であられたのではな
いでしょうか。

単独者としての悲壮なまでの孤独、
それは神を知る者のみに許された恩恵
でありましたが、先生にも正にそれ
がありました。友人山本泰次郎を評し
た次の言葉、「孤独や誤解をおそれて
人間何ができようか。それは淋しいこ
とであるが致しかたない」の中には、
先生の外柔内烈（野上寛次氏の評）の
剛直な人格と、闊達なユーモアとが目
に見えるように表現されています。

目に見えると言えば、孤独を知る先
生の孤独を描く筆は実に美しくありま
す。今ここに紹介する余裕はありません
が、『人間シュヴァイツェル』の中
の「博士」の描写をぜひお読み下さい
（例えば88、118 ページなど）。

神 秘 もう一つ先生の信仰を彩る
大切な要素は「神秘」でありましょ
う。

先生は「内村先生と神秘主義」とい

う講演で、キリスト教（思想）におけ
る神秘主義の位置を語る述べて、とく
に「無教会」におけるその認識不足を
嘆き、内村は確かに「信仰は神秘主義
ではない」とも言ったが、実は彼のな
かにこそ神秘主義が息づいていたとし
て、その事実を内村の言葉を引いて詳
述しておられます。「内村先生の信仰
の核心である贖罪、復活、再臨、すべ
てこれ神秘の霊に貫かれた非合理の世
界ではありませんか。『われキリスト
と共に十字架につけられたり。われも
はや生くるに非ず、キリストわれにあ
りて生くるなり』といったパウロの心、
『彼は我なり、我は彼なり』という先
生の胸中を誰が言葉を尽くして説きう
ると考えるのでしょうか」と。

先生の理解によれば、「神の前に独
り黙して座し、生ける神を仰ぎ、孤立
無援の自己が神から打ちのめされる、
その神秘的体験のなかで人はおのれの
罪深さを自覚するのです。その間の消
息は文字が伝え言葉が語りえない神秘

そのものです」というのが神秘主義な
のです。これはシュワイツァーがそれ
によって孤独に堪えたという「キリス
トに在る秘義」と同じでありましょ
う。そしてこの秘義は、これまたシュワ
イツァーの言う「人と人との関係には、
わたしたちがふつうに考えている以上
に大きな神秘がある」、というその神
秘に通じます。野村先生は実に「ここ
ろの医者」であられました。が、「ここ
ろをいやす」という一篇の冒頭にシュ
ワイツァーを引いて、この「このころの
神秘」を諄々と説いておられます。

ところで、野村先生は「内村とシュ
ワイツァー」という講演を二回行って、
この二人の共通点は何かを探っておら
れます。

内村は言います。「キリスト教は：
…教会ではない、…聖書でもない、
…キリスト教は人である。活きた
人である。昨日も今日もいつまでも
かわらないイエス・キリストである。」

先生はこれを評して、「その生き方の

中心には、この言葉のように、生きて
いるイエス・キリストその人が、歴史
の中ではなしに、現に眼の前に立っ
たのです。内村先生はその前に赤児
のようにぬかずいたのです」と言っ
ておられます。

ひるがえってシュワイツァーもまた、
「ガリラヤ湖のほとりで漁師たちの前
に立った名もないイエスが、いまもわ
たしたちの前に名もない人として立ち、

漁師たちに言ったと同じように、われ
に従えという。そしてかれに従い行動
した者だけに、イエスはかれが何もの
であるかを、生涯を通して現す」と言
っています。先生はこれを受けて、「シ
ュワイツァーの生涯は……イエスと対
決し、イエスを中心に動いている。か
れの深いところにある魂の問題の中
こそ、かれをほんとうに理解するとい
ぐちがあると信じます」と言っておら
れます。

先生はこの二人の共通点をこの一点
(イエス)に見出しておられました。

そしてこのような二人の生き方の相似
を「活けるキリスト・イエスとの霊的
な、神秘的な交わりの中にある」とし、
その信仰の相似を「前向きな信仰」と
呼ばれました。それは「右も左も、後
も斜めも、上も下も向かないでまっす
ぐに歩いていく単純な、幼児のような
信仰」であり、これこそが「生きた現
実の、実存的な信仰」であると言われ
るのです。

先にも申しましたように、先生はご
自分の信仰を直接に語ることに極めて
慎重であられました。しかし先生は内
村とシュワイツァーという敬愛する二
人の師の信仰を語って、実に巧まらず
にご自分の信仰を明確に告白しておら
れます。野村先生はこの二人と同様に、
しかし全く単独に、ご自分もまた「キ
リスト・イエスとの神秘的な交わりの中
に」、「前向きな信仰」をもって、
九十五年の長い、実り多い生涯を生き
ぬかれたのでした。

(所載)

『ランバレネ』第一四〇号

シュワイツァー日本友の会

一九九七年六月